

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

当会ゼミは11月と12月も休講とします

未曾有の第5波が過ぎたが、冬場に季節性の第6波の到来が指摘されるので、年内のゼミは休講とします。

コロナ禍の22カ月：齊藤 潔会員記

1、2020年1月に日本で初めて新型コロナの感染者が出現してから22カ月経過しました。第5波はこの期間最大の感染者を出し、医療崩壊や自宅放置死250人を出して、9月には急減した。減少原因は不明である。政府は9月30日で緊急事態宣言他を全面解除した。

さて、菅首相は僅か1年でコロナ対策に失敗して国民の信頼を失って、政権を投げ出しました。9月18日に実施した毎日新聞社と社会調査研究センターの全国世論調査では、菅政権の退陣は「妥当」と答えた人は60%に達した。又、菅政権のコロナ対策を「評価しない」が47%（9月3日の退陣表明前の8月28日の調査では70%）だった。

菅政権1年間のコロナ対策は、GO-TOトラベルへのこだわり、水際（検疫）対策の遅れ、科学者の意見を無視したオリ・パラを強行した。選手や大会関係者数万人に対する検疫緩和で、感染力の強いデルタ株が東京から入って日本中に運ばれてしまった。科学軽視、説明不足、異論排除、独善の姿勢は、あらゆる面に見られた。

菅首相は、ワクチンを接種すれば感染は収まるという思い込みで、接種スピードの加速に走りワクチン不足をきたし、国民を不安に陥れた。更に、8月の未曾有の感染者数の増加で医療崩壊や自宅での死者が激増している時期に、「重症患者以外は自宅療養を基本とする」と発言し、世論は「中等症以下は切捨てるのか」と激高し、国民を死の恐怖に陥れた。

2、コロナとの共存で分かった事

①感染力の強いデルタ株は、2回のワクチン接種（10月4日に6割越え）でも感染する人が出てきている。これを**ブレークスルー感染**という。これは接種の進んでいるイスラエルや欧米でも報告されている。多くの人は軽症だが、死亡者も出ており、又、感染者の70%以上は高齢者である。

現在厚労省で3回目のワクチン（ブースター）を、2回目

ワクチン接種後8カ月経過の医療従事者、高齢者、18才までの重症化リスクの高い人向けに検討されている。

②**集団免疫**の獲得によってコロナ感染を終息させることはワクチンの免疫の持続力に依存するが、強力なデルタ株の出現で、人口の70%以上のワクチン接種率でも集団免疫の獲得は困難である。理由は接種後に免疫が低下する事とデルタ株に対してはワクチンの予防効果が減少する為である。又、世界が足並みを揃えないと終息しない事である。途上国や接種の進まない地域で流行がやまず、新変異株が生まれ、それが国境を越えて持ち込まれ、流行が収まった地域でも再拡大する可能性があるからである（北里大・仲山 哲夫教授）。

③コロナの中・重症者向けに有効な治療薬は、点滴療法である。一方、軽症者向け治療薬として**飲み薬**が、米メルク社の（モルスピラビル）が年内流通の可能性が出てきた。他に中外製薬（ロシユ）、ファイザー、塩野義製薬（1～3月実用化）、富山化学（アビガン）の各社が治験中である。

④コロナに対する日常的対策：コロナの感染経路は、空気中に漂うウイルスを含んだ微粒子「エアロゾル」を吸い込む事で起きる**空気感染**（エアロゾル感染）である。

従って、基本的感染対策は、**換気とマスク**着用である。マスクは**不織布マスク**が有効である。ウレタン製、布製マスクやアクリル板は感染を防ぐ効果はない。不織布マスクはウイルスの吸い込みと吐き出しを約8割止める。**換気**はエアロゾルが感染源から1～2m程度の範囲に濃く漂うので、不特定多数が集まる場では送風機等で部屋の空気をどんどん外に出して新しい空気を取り入れる事が重要。（愛知県立大・清水 宣明教授＝感染制御学）。

印欧語族とアフロアジア語族考

—磐城 妙三郎会員記—

「～語族」とは比較言語学における分類用語で、共通の祖語から派生したと認められる同系統の言語グループを言い、これに対して同系統と証明されていない言語群を纏めて呼ぶ時は「～諸語」という。アフロ・アジア語族はかつてセム・ハム語族といわれていたグループで、その後ハム語

族の分類が否定されアフロ・アジア語族と呼ばれるようになった。セム語派やエジプト諸語を含む北アフリカの言語が含まれる。かつてのセム・ハム語族の由来は旧約聖書の創世記にある「ノア方舟」をその嚆矢とするとの事なので、興味を持ち調べてみたので本稿で紹介する事とした。

1. 旧約聖書について

旧約聖書は「モーセ5書」ともいわれ、モーセによって編纂されたとする説とユダヤ人の「バビロン捕囚」時代にユダヤ教指導者たちによって編纂されたとする説など諸説がある。現存する世界最古の旧約聖書は死海文書に含まれるが化学分析の結果、紀元前250年ごろから紀元70年間の写本と考えられている。

帝政ローマ期の政治家及び著述家であるフラウィウス・ヨセフス(37年 - 100年頃)による著作『ユダヤ古代誌』20巻がある。(『ユダヤ古代誌』ちくま学芸文庫 1999年)

中世においては修道士たちにより熱心に読まれ、17世紀に近代語訳が誕生してからは、英国やヨーロッパのキリスト教徒の家庭や知識人の書棚の聖書の隣に置かれ『小聖書』として広く、熱心に読まれたとされ、旧約時代編は2千年前のユダヤ人ヨセフスが、当時のローマ世界に住むローマ人とギリシャ人に対してユダヤ人の歴史を語りかけたものである。

本稿では歴史書としての本書を参照して以下考察する。

2. ノアとその子孫

ノアは最初の人類アダムから数えて10代目の子孫で、神から「腐敗堕落した子孫をすべて絶滅させ、ノアとノアに従う者たちを救う」との啓示を受け、洪水から救われる。ノアには「ヤペテ」、「セム」、「ハム」という3人の息子がいたが、神は彼らに異なる言語をしゃべらせ、お互いの意思が通じなくさせて、分散を余儀なくして各地への植民を促すこととした。

3. 分散と植民

ヤペテとその子孫たちはアナトリア半島東部、黒海東部沿岸、カフカス地方、バルカン半島東部、キプロスなどに分散し、それぞれ植民した。アナトリア半島ではヒッタイト、フリギア、黒海東部沿岸ではウラルトゥ、カフカスではスキタイ、バルカン半島ではトラキア、イオニアでは古代ギリシャなどの古代国家がのちに誕生する。スキタイとはアリア人の源郷を指すのであろうか。比較言語学ではこれらの地域で使われてきた言語グループを印欧語族とよび、その共通祖語はインド系アリア人とイラン系アリア人を祖先とする説が通説である。

ハムとその子孫たちはレバント地域から北アフリカに分散

して、植民した。フェニキア、レバノン、パレスチナ、古代エジプト、古代リビア、古代エチオピアなどの古代国家の始祖となった。比較言語学ではかつてハム語族といわれたが祖語となる言語が見つからず、現在ではアフロ・アジア語族のエジプト諸語に分類されるが、ハム語派は存在しない。またアフロ・アジア語族の祖語はいまだ構築には至っていない。

セムとその子孫たちはペルシャ湾東岸地域、イラク、シリア、アナトリア半島西部等に分散して植民した。エラム、アッシリア、、バビロニア、アラム、リュディアなどの古代国家の始祖となった。比較言語学では現在セム語派とよばれアフロアジア語族に分類される。

セムの子、アルパクサデはカルディア(バビロニア)へ植民したが、ノアから数えて10代目のアブラハムとその家族は神に導かれカナン(イスラエル)へ移住する。アルパクサデの孫のエベルに因んでユダヤ人からヘブル人と呼ばれ、ヘブライ人の由来となった。

4. 創世記の分散と植民と古代オリエント史

ノアと3人の息子の植民は紀元前4千年紀から紀元前2千年紀におよぶ古代オリエント史に相当すると考えられる。古代オリエント史では4千年紀(BC4000年~BC3001年)にアフロ・アジア語族がメソポタミアとエジプトにいたる「肥沃な三日月地帯」への植民し、紀元前2千年紀(BC2000年~BC1001年)に印欧語族がアナトリア東部、黒海沿岸からカフカス地方への植民したとされている。

5. 旧約聖書編纂の時代背景

アダムとエバが住んだ楽園について『ユダヤ古代誌』には次のように記されている。

「モーセはこう語っている。中略 この園は一つの川の水でうるおされ、その流れは全地を一周して分かれ四つの川となった。そのうちのピソンはインドに向かって流れ、ギリシャ人がガンジス川と呼んでいる海に注いでいる。ユーフラテスとチグリスの両川はエリユトラ海に注いでいる。中略最後に、エジプトを流れるギボンであるが、ギリシャ人によってナイル川と呼ばれている。」この記述は紀元前7世紀の粘土板にかかれた「バビロニアの世界図」の描写に酷似している。またノアと3人の息子が分散、植民したとされる地域は紀元前6世紀のアナクシマンドロス(古代ギリシャの哲学者)の世界図の描写の中に収まる。(ウィキペディア「初期の世界地図」参照)ユダヤ人のバビロン捕囚は新バビロニア時代(紀元前 597年)に始まり、アケメネス朝ペルシャによる解放(紀元前 537年)までの60年間におよぶ。当時のバビロニアやギリシャにおける世界観をもとに言語

の異なる民族の分布を創世記に書き記したのではないだろうか。古代人の言語分類能力が近現代の言語学に匹敵するとはただただ驚愕するばかりである。了

『梁書倭伝の読み方』を再考する

—槌田 鉄男会員記—

今年初の古代史ニュース 302 号で『水行10日陸行1月』を再考する」と言うタイトルで投稿したところ 304 号で永井輝雄様から梁書倭伝の『復立卑彌呼宗女臺與爲王 其後復立男王並受中國爵命』の文章の解釈について特に『並』の字の意味について異論が出されたので自説を再々考して見解を出してみました。

晋書倭人伝や日本書紀には 266 年に日本から晋(西晋; 265-316)へ朝貢があったことが書かれています。元々蜀の人であった陳寿は蜀が滅び新たに晋が誕生すると晋の人となり三国志を書き始めました。この時の朝貢は彼が三国志を書き始めるほんの数年前のことだったと思われまふ。私は彼が魏志倭人伝を書くに当たって倭の最新情報を得るため、この時の朝貢に注目しないはずがないと考えこの文章に着目しました。梁書倭伝にあるこの文章もその朝貢の時のものと考えたからです。

辞書を見ると『並』についていくつかの意味がありますが、どの辞書も一義的には「ならぶ」となっています。そうするとこの文章は『また卑彌呼の宗女・台与を王にした。その後再び男の王が立って並んで中国の爵位を得た』となると思います。

様々な解釈

しかし永井様は「男の王が立って並んで(立男王並)」あるいは「並んで中国の爵位を得た(並受中國爵命)」ということがどんなことなのかよく分かりません』とされており「台与と共に男王が並んで爵位を得ている」とは読めないといわれています。そして『並』を「みな」とした山尾幸久氏の訳文(『東アジア民族史 1 正史東夷伝』(1974 東洋文庫)を山尾氏が[]の文で補ったもの; 先の文章の前文『正始中卑彌呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺』からの訳を抜粋)『正始年中(240-248)に卑彌呼が死んだので、改めてまた男王を立てたが、國中これに服さず、またまた互いに殺し合いになった。そこでふたたび卑彌呼と同じ族団の女性臺與を王に擁立した。臺與の後には再度男王を立て、みな中国の爵命を受けた。[すなわち東]晋の安帝の治世(396-418)には倭王の賛がいた。・・・(倭の五王の話が続く)』を紹介されています。

この倭王『賛』は宋書にある『讚』と思われまふが、讚は

宋(420-479)に 421 年に朝献したことになっています。晋書で安帝の時に倭から朝献があったのは 413 年ですが、その時の王名はありません。従って晋書と宋書を合わせて読めば 413 年の朝献も讚と言うことになると思います。この時の晋は山尾氏が[すなわち東]と補っているように東晋(317-420)のことです。

山尾氏の解釈は私と全く異なりますが、この文章について他の例もみてみたいと思います。纏向学センター・センター長の寺沢薫氏は著書『王権誕生』(2008 講談社学術文庫)の中で「北史や梁書に泰始二年(266 年)の台与の後に立ち晋王朝に入貢して爵命を受けた男王に注目したい」とされています。これに続く文章でこの男王を最初の定型化された大型前方後方墳・箸墓の被葬者に想定しようとしており、氏は箸墓を 3 世紀後葉から末の墓とされているのでこの時の晋は台与が朝献した西晋の事であり東晋ではない事になります。近畿説を持論とされる寺沢氏はこの男王を台与の後継者と考えられているようです。

又、国立歴史民俗博物館教授の仁藤敦氏は著書『卑彌呼と台与』(2008 山川出版社)の中で「復(また)卑彌呼の宗女台与を立て王と為す。其の後復男王を立て、並びに中国の爵命を受く。晋安帝の時、倭王賛あり」と書かれており『並』は「ならび」とされています。両氏の著作は山尾氏が参考とした『東アジア民族史 1 正史東夷伝』より新しい物であり両氏はこのような考え方があったことをご存じだったはずで

台与の後に立った男王

“台与の後に立った男王”が誰であったかが最大の論点になると思いますが、山尾氏の解釈では台与の後に立った男王は東晋および宋に朝見した『倭の五王』と言うことになります。しかし、寺沢氏の文章では西晋に朝貢したとされており倭の五王でなかったことは明らかです。また仁藤氏の文章では先ほどの文章に続いて「台与と倭の五王を連続的に記す」とはされていますが『受く』後に句点が打たれているため男王は倭の五王ではないように思えます。

台与が卑彌呼の死で後を継いだのは 248 年頃です。その時 13 歳だった台与が退いたのは遅くとも 3 世紀末頃だと思います。一方、先ほどの解釈で倭の五王の讚が東晋に朝献したのは 413 年のことです。2つの出来事は百数十年の隔たりがあったことになります。それだけの隔たりを持って『臺與の後には再度男王を立て』とするのは不自然と思われたのか、永井様は山尾氏の説を補完する形で『その後再び男の王が立って(其後復立男王)』は『台与が死亡したか退位したかで王位が空席だったので、再び

男の王が即位した』という意味であり」とされた上で「梁書の著者は266年の朝貢は知らずに卑弥呼のあとを台与が継いだこととその後の倭の五王の隔たった時代を繋げるために『其後復立男王、並受中國爵命』の文章を突っ込んだ」と推察されています。

しかし『王位が空席だったので、再び男の王が即位した』という意味であり」とするならば次の男王が即位するのは台与が死亡したか退位した直後であり、それを百数十年後の倭の五王とするのは不自然です。

新しい解釈

私は『並』を「みな」の意味で使う用例を他に知りません。この意味で使うのはめったにないことだと思います。「ならば」の意味で更に考察を進めてみたいと思います。

『其後復立男王』に注目してみましょう。私は永井様の指摘を受けるまでこの文をただ漠然と台与に続いて単に男王が立ったこととしか考えていませんでした。しかし改めてみると『復立(再び立つ)』と言うのがどうも気になります。この男王が立つ前にも男王(本人を含む)が立ったことになります。整理すると、卑弥呼⇒男王⇒台与⇒(この)男王と言うことになります。

梁書で『復立卑弥呼宗女臺與爲王。其後復立男王、並受中國爵命』の前にある文章は『正始中卑弥呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺』です。先に紹介した寺沢氏や仁藤氏の文例ではこの文章がないので、両氏が先程の文章を書くに当たってこの文章をどう解釈されたのかは不明です。

山尾氏の場合はこの文章を『またまた互いに殺し合いになった』と『またまた』を追加されています。そうなるこの男王の前に立った男王の時も『殺し合い』があったことになりませんが、梁書にはそのような記載はありません。魏志倭人伝にある『其の国、本と亦た男子を以って王と為し、住まること七・八十年、倭国乱れ』の男子の王のことだと思いますが、山尾氏は恐らくこの“男子を以って王”のことを“台与の後に立った男王の前に立った男王”とされたのだと思います。

しかし『正始中卑弥呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺』にも男王がいます。この文章と先の文章を続けて読むとこの男王が“台与の後に立った男王”のように思えてきます。二つの文章を続けて読んで解釈は「正始年間の卑弥呼の死後、男王が立ったが国中が不服で殺し合いになった。(それで)卑弥呼の宗女台与が王になった。その後(この)男王が再び立って(台与と)並んで中国の爵位を得た」となります。梁書の著者は266年の朝貢を知っていたこと

が前提になりますが卑弥呼の死から18年後であり、そこに大きな時の隔たりはありません。

つまり台与と並んで爵位を得た男王は卑弥呼の死後立った男王であり、その時は国中が不服で王になれなかったが再び立って266年の朝貢の時台与と並んで爵位を得た(王になれた)と言う意味になると思います。このように解釈した方がより自然と思われるのですが如何でしょうか。

了。
(参考文献):永井輝夫 古代史ニュース304号『梁書倭伝の読み方』古代史教養講座2021年。植田鉄男 古代史ニュース302号『『水行10日陸行1月』を再考する』古代史教養講座2021年。仁藤敦史『卑弥呼と台与』山川出版社2009年。寺沢薫『王権誕生』講談社学術文庫2008年。井上秀雄(山尾幸久氏訳)『東アジア民族史 1 正史東夷伝』東洋文庫1974年。以上。

著書の紹介:竹倉史人著『土偶を読む』

著者は所謂考古学者ではない。人類学者である。

彼は神話をヒントに学際的アプローチで縄文土偶を、「縄文人が日常的に食料としていた植物、貝類を象ったもの」と解説しました。土偶に、食料の視点を取り入れた解釈は注目に値する。土偶は縄文14千年間の内、最大人口26万人の中期以降の3千年間にその多数が出現した。この時期の食文化が温暖な気候で定住と栽培によって、炭水化物や貝類が主体となり、そこに土偶による植物や貝類の精霊祭祀があった事を示した。今後は、世界最古の多種多様で芸術的文様の縄文土器についても著者の豊かな解釈を期待したい。当会のモットーである「通説」を疑う会員の皆さんの一読を推奨します(齊藤 潔会員記)

日本人の祖先は3集団

<以下は、国際研究チームの報道機関向け発表要旨>
金沢大、ダブリン大、鳥取大、岡山理大等の国際研究チームが、9月17日に国際学術誌『Science Advances』に発表した。「日本列島の遺跡出土人骨から新たに12個体(縄文人9個体・古墳人3個体)のゲノムデータの取得に成功した。これらのデータに加え、既報の縄文人および弥生人のゲノムデータと大陸における遺跡出土古人骨のゲノムデータを用いて、大規模な集団パレオゲノミクス解析を実施した。その結果、縄文人の祖先集団はおおよそ20,000~15,000年前に大陸の基層集団から分かれ、初期集団は1,000人程度の小さな集団サイズを維持していたことが分った。そして、弥生時代には北東アジアに起源をもつ集団が、古墳時代には東アジアの集団が夫々日本列島に渡ってきた事が明らかとなった」以上。